

2012 年 IFTA シンガポール大会講演概要

アシュク・インベストメント社
チーフ・インベストメント・オフィサー
林則行氏

スピーカー・プロフィール

林則行さんは、米コロンビア大学にて、MBA を取得、ジム・ロジャーズに師事しました。欧米の投資銀行および投資信託会社にてポートフォリオ・マネジャー、シニア・アナリスト、のちに世界最大の政府系ファンドであるアラブ首長国連邦のアブダビ投資庁（ADIA）にて、日本株運用部長を務めた経歴を持つ、非常に数少ない日本人の 1 人です。現在は、香港にてアシュク・インベストメント代表を務めています。

投資業界にて 30 年以上の経験を持ち、最新刊「株の公式」（ダイヤモンド社）は明快なルールとシステム的なアプローチにより、日本の投資家から高い評価を得ています。また、日経マネーのWEB連載は同社記事の中で最大のヒット数を記録、また、講演も最高レベルの評価を得ています。

プレゼンテーション要旨

ローソク足ボラティリティ

本講演ではローソク足の考え方に基づいた全く新しい方法を提示します。私たち投資家は 4 本値以上の情報をローソク足から得ているのですが、そのことに気づいていません。

ボラティリティ・ブレイクアウトは、投資のタイミングを計る場合に非常に有益度の高いツールです。事実、多くのプログラム・トレードがボラティリティ・ブレイクアウトによってつくられています。

収益を上げるには、まずボラティリティをできるだけ正確に測定する必要があります。しかし、そのためによく使われるヒストリカル・ボラティリティは、定義の点において本質的な問題を含んでいます。

たとえば、過去 20 日間のヒストリカル・ボラティリティは過去 10 日の場合に比べて大きいのが通常です。計測期間が長いほどボラティリティが大きくなる傾向にあります。これは理にかなっていません。

今回提案するローソク足ボラティリティは従来の考え方にある根幹的な欠点を補ったよりシンプルな手法です。

次ページ以降は、林さんの予定講演概要です。

2012 年 IFTA シンガポール大会講演概要

ローソク足ボラティリティ

林則行

ボラティリティはテクニカル分析の核心

「株式投資で高いリターンをあげるために最も大事なテクニカル分析は何か」と聞かれた場合、ぼくは「ボラティリティ」と答えます。

株価の変動には「上がる」と「下がる」がありますのが、もうひとつの側面があります。それが「大きく動く」「小さく動く」です。これがボラティリティです。

例えば、2日続けて10円ずつ上がれば、2日間では20円上がります。これに対して、昨日10円上がり、本日10円下がった場合は、2日間では値動きはゼロです。値動きは違いますが、2日間のボラティリティは同じです。ボラティリティは株価の方向(上・下)には全く関係のない値幅だけをとらえた考え方です。

株価が今後上がるかどうかを予測する際には、ボラティリティが有効です。ここで大切なテクニカル・ルールを紹介します。すなわち、「株価が上放れして大きく上昇する確率が高いのは、離陸前のボラティリティが小さい時だ」ということです。

「嵐の前の静けさ」という言葉があります。株式ではこれをもじって、「暴騰の前の静けさ」です。活火山のように爆発し上昇する株の、そのスタート時点は鳴かず飛ばずだということです。

図表1見てみましょう。これは信越化学の1999年～2009年の月足です。この中で最も値動きの小さな時期を赤枠で囲っています。株式の暴騰はそのあとに起こっています。

図表1 株価の小さな動きは暴騰の前の静けさ



従来の発想には根本的な欠陥がある

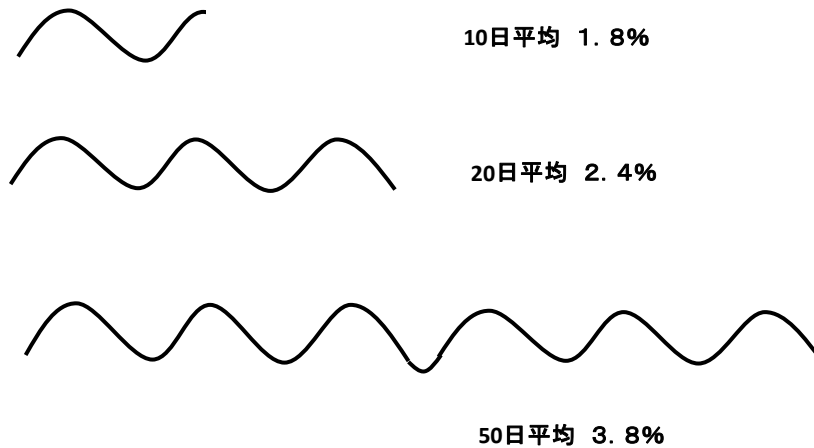
ぼくは従来のボラティリティ(ヒストリカル・ボラティリティ)の計算方法に大きな問題があることに気づきました。たとえば、日経平均のボラティリティは図表2にあるように、

10日平均 (1.8%) < 20日平均 (2.4%) < 50日平均 (3.8%)

となっています。すなわち、日経平均のボラティリティ10日平均(1990年からの平均)は20日平均より小さいということです。20日平均は50日平均より小さいです。これは理屈に合致しません。

図表2 従来のボラティリティには矛盾がある

日経平均1990年からの平均値



本来はいずれの期間をとっても、ボラティリティは同じはず

20日間とは2つの隣り合った10日間の合計です。1.8%と1.8%のボラティリティが隣りあった場合はその合計は1.8%になります。10日のボラティリティと20日のボラティリティとは同じにならなくてはなりません。

こうした問題が生じた理由は、ボラティリティを計算するのに、平均という考え方を用いているからです。この点については講演で明らかにいたします。

ローソク足は日本人が作った最高のチャート

ITFAで紹介する新しいボラティリティの考え方は日本古来のローソク足を基に作ったもので、これまでの平均を基にした考えの欠点を克服することができました。「どの株がよりボラティリティが低い(高い)か」をより正確につかむことができるようになり、大化けする銘柄の選定が容易になりました。

また、この考え方は売りシグナルにも応用できます。カギ足をボラティリティによって補正していく考え方です。

日本人が作ったローソク足はこうした考え方が深く内包された最高のチャートです。

なお、この発表の基になっているのは、「NTAA創立30周年記念論文ローソク足ボラティリティ」です。IFTAのシンガポール大会ではテクニカルアナリスト以外にファンドマネージャも多数出席されることから、スピーチ内容は統計用語や専門用語を用いないで、わかりやすい解説を行うように努めます。